

NO-MA 2023.7 / VOL.32

ボードレス・アートミュージアム
NO-MA ニュースレター

展覧会レポート

林田嶺一のポップ・ワールド

Topic of NO-MA

盲ろう者との美術鑑賞成果展示
「静かな夜にこぼる」を振り返って

BAColumn

ボードレス・アートを巡るコラム VOL.02

地域インタビュー

あのひとの近江八幡スタイル
近江八幡まちや倶楽部オーナー
株式会社Wallaby 代表取締役 宮村 利典氏



林田嶺一のポップ・ワールド
 2023年2月11日(土)~5月14日(日)
 主催:ボーダレス・アートミュージアムNO-MA
 社会福祉法人グロー~生きることが光になる~
 後援:滋賀県、滋賀県教育委員会、
 近江八幡市、近江八幡市教育委員会
 協力:近江八幡観光物産協会、
 しみんふくし滋賀、
 マエダクリーニング仲屋店

1933年、中国満州で生まれた林田嶺一。幼少期は父親の転勤や戦況にもない、大連、ハルビン、上海、青島などを転々としながら過ごし、終戦を迎えた1945年に初めて日本に降り立ちました。その後、林田は2カ月かけて列車で移動し、北海道へ。北の大地でアートに出会い、以降は2022年に逝去するまで独学による創作活動を続けました。

林田の作品には膨大な移動のなかで目にした、たくさんの光景が刻まれています。父親に連れられて見た都市の風景。奉天で見た万里の長城。家族とレストランで食事をとっていたときには、ガラス越しに第二次上海事変の銃撃戦も目撃。そして、日本で目の当たりにした、沈没した船舶、焦土と化した姿——引き揚げから数十年、ある種の「傷」として、それらの記憶を封印していた林田は、1970年代後半から堰を切ったように、制作を通じて自らのルーツをめぐり始めました。そのきっかけを与えたのは、三岸好太郎美術館の学芸員だったようですが、一方で林田は生前、その初期衝動について、眠っていた記憶を引き出し、「絵のなかに子どものころの自分を救出する気持ちだった」と語ってくれました。

林田が制作する上で、「記憶」は

とても重要な要素です。記憶がゆえ、現在の視点も加わり、幻想や思い込みも容易に入り混じっていきます。また、作品のイメージだけでなく、作り方そのものにも、記憶と向き合う姿勢が表れています。さまざまな素材やフレームを複雑に組み合わせ、いくつ構造からは、記憶のかけらをつなぎ合わせ、修復しようとする意識も読み取れます。

本展はこうした林田の意識に迫る試みといえるでしょう。NO-MAの1階では、子どものころの忘れられない記憶を描いた作品《八幡港》と、年を重ね繰り返し絵にした北海道ののどかな風景の作品を展示。蔵では幻想に対するオブセッションな感覚が如実に表れ、その後の制作に大きな影響を与えた「人間製造工場」や「顔のある風景」のシリーズで構成しました。また、2階では木材とワイヤーを素材にした什器を用い、あえて作品の裏側が見られるようにしました。その意図は主に二つあり、一つは作品の構造を把握するため。もう一つは林田自身の言葉に出会うためです。木材やアルミ缶、玩具などの素材が複雑に組み合わさった作品の構造と制作の実践は、裏側を見ることでより明確になるはず。また、裏面には直筆で作品のコンセプトなどが記されています。裏と表を交

互に見つめる体験は、作品鑑賞におけるバイアスを取り除き、気づきを与えてくれます。「林田嶺一」という作家による長きにわたる実践。その創作の足跡に様々な角度から思いを馳せていただく展覧会になったと思います。



2階



作品の裏側



会場ボランティアの皆さんのご案内で鑑賞していただきました

る面白さがあると思った」「『霞』や『雲』などのイメージが盲ろう者の世界の中で細かにあることを感じて驚きました」など、盲ろう者が捉える世界というものに驚き、感覚をシェアしあうことに共感する声が聞かれました。

盲ろう者と美術鑑賞を結ぶ実践は、全国的にもあまり例がなく、盲ろう者が美術館や文化施設に出向き、鑑賞を楽しむことには、いまなお高いハードル

があります。そのような状況のなかで重要なのは、「盲ろう」という感覚を「視覚」「聴覚」が欠落している状態と捉えるのではなく、その知覚世界の多様性に触れ、リスペクトを持つことではないでしょうか。見える・見えない、聞こえる・聞こえないという互いに異なる感じ方を交わそうとしていくことは、誰しもが美術鑑賞を楽しめる世界へとつながると信じて、これからも実践を続けていきます。

会場ではVRゴーグルをつけて、作品が見えない状態のまま、対話の記録(画面に映し出される文字や流れる音声)を読んだり聞いたりしながら、作品をさわって鑑賞します。会期中は、多くの来場者の方々に体験いただき、盲ろう者の知覚のありように出会う機会となりました。

また、今回の成果展示は、会場ボランティアの方々の協力なしには語れません。慣れないVRゴーグルの操作や鑑賞方法のご案内、来場者の手引きなど、様々なタスクにご対応くださいました。「ゴーグルが起動しない!」といったトラブルもありましたが、皆さんに粘り強く取り組んでいただいたおかげで、たくさんの方に展示を楽しんでもらうことができました。

体験した方々からは感想が多く寄せられています。「盲ろうの方との対話を聞くことがあまりないし、さわらぬのみで鑑賞する体験は初めてだったので面白く新鮮だった。一緒に鑑賞す

2023年2月11日から5月14日にかけて、NPO法人しが盲ろう者友の会とNO-MAの協働による美術鑑賞プロジェクトの成果展示を行いました。見えない・聞こえない世界を生きる盲ろう者やその支援者とともに、さわることや言葉を交わすことを通した美術作品の鑑賞を試み、その成果を展示しました。

作品は、京都市立芸術大学ビジュアル・デザイン専攻の学生たちが2021年に制作発表した「さわる絵画」。3名の盲ろう者の方とそれぞれ作品を鑑賞し、3通りの対話が生まれました。その記録を基に、どうしたら盲ろう者の知覚世界に触れられるかを考えながら、展示を企画していきました。



Topic of NO-MA トピ

「盲ろう者との美術鑑賞成果展示」
 「静かな夜にこぼる言葉を浮かべ」を振り返って

文:石田瞳(自立生活支援員)

VRゴーグルを装着すると、真っ暗な画面に対話した言葉が文字で浮かびます

「どうしてこんな作品ができるんだろう」
を伝えてきた19年間

文：山之内洋
(ボーダレス・アートミュージアムNO-MA管理者)

全国でも初となる社会福祉法人が運営する「ボーダレス・アートミュージアムNO-MA」は、2004年に開館して今年度で20年目を迎えます。企画展「NO-MA GRAPHIC 2004-2023」では、開館以降開催してきた88の企画展から41点のポスターを一堂に展示し、19年間のNO-MAの取り組みを振り返る機会としました。

NO-MAが開館した当時は、障害のある人たちの芸術文化活動はまだまだ限られた施設などで行われておらず、ましてや展覧会となると地域差はあるものの皆無に近い状況でした。たとえ、そのような催しを実施したとしても、スーパーや銀行などの催事場や待合室、公民館などが会場となり、展示とは程遠い「陳列」といった雰囲気のものでした。施設での活動を中心として生み出された彼らの作品は、観るものに対して、大小何らかの衝動を伝えてくれていたのは間違いなく、買い物や用事の一つではなく、ゆっくりとその作品群と対峙できる空間がほしいというのが我々の想いでした。そして、



19年間に発行してきた図録の数々。試行錯誤の連続だった

彼らのこと、彼らの作品のことを、もっと広く世の中の人たちに知ってもらいたいという思いが心の中に常にありました。当時は美術館やギャラリーでこれらの催しを開催することは難しく、ならば自分たちで美術館、ギャラリーを運営しようということで、NO-MAの開館に至りました。

当時は私をはじめ福祉畑で仕事をしてきた者ばかりで、芸術文化に精通している職員は一人もおらず、何から何までもが手探り、手作りの状態でした。そのためわからないことばかりで、毎日が試行錯誤、その都度へこんでばかりでした。ただ、彼らの作品と出会う瞬間はテンションが上がり、楽しい時間でした。

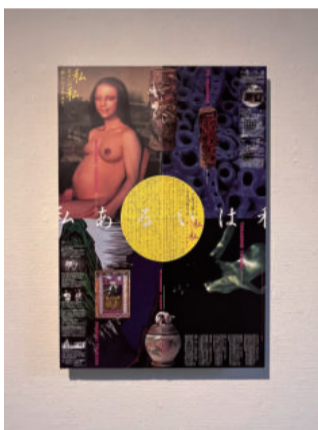
彼らの制作過程を見聞きしているなかで、その集中とエネルギーには驚かされることばかりでした。「どうしてこんな作品ができるんだろう」が、当時の私には常に頭の中にはありました。障害の特性から生じるこだわり行動は、生活面では問題行動と扱われ、その行動を「改善」させるために施設等の



NO-MAの足跡を年表で展示した

支援者たちは四苦八苦していました。しかし彼らの作品や制作過程を見ているうちに、そのこだわりがあるからこそ、これら作品を制作できるんだと気づかされました。マイナス面と思いついてきたこだわり行動が表現活動の点において大きなエネルギーになっているんだと、肯定的に説明する言葉をもたらえた気がしました。

障害のある人たちを取り巻く環境が社会の変革と比例して変わっていくように、ボーダレス・アートミュージアムNO-MAもまたその時代に適した美術館として、常にアンテナを伸ばしていく必要があると感じています。



NO-MAで最初に開催した「私あるいは私」展を伝える展示 (NO-MA GRAPHIC 2004-2023より)

地域インタビュー ohsi-hachiman local interview

「こんないい町に住んでいるよ」と
自慢したくなるような町を目指して

近江八幡まちや倶楽部 オーナー
株式会社Wallaby 代表取締役

宮村利典氏

文：赤澤啓四郎(自立生活支援員)



近江八幡まちや倶楽部

<https://machiya-club.org/>

江戸時代の酒蔵を改装した複合施設のまちや倶楽部は、映画のロケ地にもなるなど、近江八幡旧市街の町歩きで欠かせない人気のスポットだ。落ち着いた空気が漂う宿泊施設や、女性に人気の雑貨店、アンチエイジングに効果があるナッツ店など、ここにしかない店舗が軒を連ねる。オーナーを務めるのは、宮村利典さん。NO-MAで開催した町歩きツアーのガイドを務めていただいたり、ラジオ番組に登場いただいたりするなかで、旧市街の活性化を語る言葉に地域への深い愛情がにじむ。

「2012年に使われなくなった酒蔵を購入したのは父でした。地域の高齢化が進み、若い人は都市へと流れ、商店街がシャッター街へと変化していた時期。当時、私は滋賀県の健康福祉政策課で働いていたのですが、県内でも孤独死が見られるようになってきているという話を

聞いて、当たり前だと思っていた風景がボロボロになっていくのではないかとこの恐怖を感じていました」

将来に暗いイメージを抱きながらも、地域を維持するためにチャレンジする人たちから刺激を受け、酒蔵を活用した近江八幡の活性化を志したという。2015年3月に県職員を退職して、まちや倶楽部のオーナーに就任。「奇跡の連続というか、出会いにも恵まれて、少しずついい形になってきました」と語るように、宮村さんと思いを同じくする、同世代の仲間が集まってきた。

新しい店舗が生まれると、その店長さんや新しい客層が入りやすくなる。観光客だったり、地元の人だったり、女性だったり、外国の人だったり。そんな日常のちょっとした変化を見かけると、宮村さんはうれしくなるという。

多様なにぎわいを生むひとつにNO-

MAの展示がある。NO-MAはこれまでに何度もまちや倶楽部を会場として展覧会を行ってきた。「いつも展示方法にこだわっていて、どんな空間になるか楽しませてもらっています」と振り返る。

「私は、細かく町並みを描き込んでいく人の作品を見るのが好きなんです。自分も描きたいなって思ったりもします。私たちが暮らす町に美術館があるっていうのは、自慢のひとつですね」

現在、宿泊業以外にも、コワーキングスペースや伝統工芸品店など多角的に事業を広げている宮村さん。今後は、古い建物を再活用するノウハウも伝えていけたらという。

「まだまだ道半ばです。こんなにすてきな人たちのお店を、もっとたくさんの人に知ってもらいたい。新しいことに挑戦したいという若い人たちの思いが、近江八幡という古きよきものを大切に作る町と重なったらいいですね」

酒蔵の購入から10年が経ち、旧市街の町並みは確かな変化を遂げている。

まちや倶楽部の古い建物の雰囲気を活用して展覧会を開催 (企画展『日本人と自然-BEYOND-』)



あの一町の 近江八幡 スタイル



まちや倶楽部の宿泊部屋は、日本家屋の落ち着いた雰囲気そのまま残している



<NO-MAグッズのご案内>

作品のメモ帳やトートバッグなど、NO-MAのミュージアムショップやホームページからお買い求めいただけます。



<NO-MA企画展グッズのご案内>

2023年5月14日まで開催していた企画展「林田嶺一のポップ・ワールド」の図録を、NO-MAおよびNO-MAホームページにて販売しています。また、過去に開催された展覧会の図録や関連書籍、ポストカードなども取り扱っています。ぜひ、お求めください。



NO-MA次回企画展 「並行世界の歩き方 上土橋勇樹と戸谷誠」

2023年7月29日^土～9月18日^日

11:00～17:00 月曜休館(祝日は開館、翌平日休館)

会場: ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

観覧料: 一般300円(250円)、高大生250円(200円)

中学生以下・障害のある方と付添者1名無料

※()内は20名以上の団体料金

主催: ボーダレス・アートミュージアムNO-MA、

社会福祉法人グロー(GLOW)～生きることが光になる～

後援: 滋賀県、滋賀県教育委員会、近江八幡市、

近江八幡市教育委員会

協力: 近江八幡観光物産協会、しみんふくし滋賀、

マエダクリーニング仲屋店、やまなみ工房

【作品上】上土橋勇樹 Book(洋書の表紙)

【作品下】戸谷誠 《2000→2007, 2020→》



実際には存在しない本の表紙、DVDジャケット、映画のエンドロールなどを「あたかもありそうな」というユニークな視点で制作する上土橋。鮮やかな色合いに負けないくらいのシュールな世界を展開し、途方もない年月をかけて複製や加筆修正を繰り返す戸谷。本展ではふたりの表現のなかに幾重にも広がる、並行世界＝パラレル・ワールドを体感いただけます。

NO-MAの情報発信

【おすすめコンテンツ①】

NO-MAホームページを、見やすく、使いやすく、リニューアルしました! <https://no-ma.jp/> →



リニューアルに際して、以下のポイントに配慮しています。ぜひ、ご覧ください。
(※アドレスの変更はありません)

◎アクセシビリティの観点から、スマートフォンに対応したサイトになりました。

◎見えづらいなどの障害がある人たちにも、できるだけ情報が届くように、コントラストのはっきりしたデザインとしました。

◎視覚に障害があり読み上げ機能でサイトを閲覧している人たちが情報にたどりつきやすいように、大切な情報をページの上部に集めました。

◎子どもたちやネットが苦手な人でも情報にたどりつけるように、シンプルなページ構成にしました。

◎NO-MAが目指す「誰もが訪れやすい美術館」というコンセプトを、明確にしました。 などなど…

【おすすめコンテンツ②】

「林田ワールド」ギャラリー・ツアーをお楽しみください!

企画展「林田嶺一のポップ・ワールド」の関連イベントとして公開してきた「林田ワールド」ギャラリー・ツアーの映像を、引き続きアーカイブサイトとYouTubeチャンネルで公開しています。この映像では、林田嶺一さんと親交が深かった彫刻家の原田ミドーさんと本展担当学芸員の横井悠が、林田さんの作品の奇想天外な世界観や制作の裏側を語ります。ぜひ、お楽しみください。



編集担当・白井文佳 【編集後記】

私は幼少期のころから変わった人であった。人と同じ行動をとることへの苦手意識、すぐに癩癩を起し感情の起伏が激しいため、どことなく生きにくさを感じながら学生生活を過ごした。そんな私がある作家の作品に出会い感銘を受けた。天井から吊り下がったロープにつかまりながら、足で激しく油絵具を飛ばすという抽象作品で『作品づくりの工程は自由で、やりたいように表現をしていいんだ』と思わせてくれた。

大学は地元の芸術大学に進学し、制作活動をしていくなかで様々な作家のことを調べていると、ある作家が双極性障害もしくは境界性人格障害だということがわかった。障害や精神疾患、統合失調症で幻聴や幻覚から逃れるために絵を描かれている人の存在を初めて知った。そのような人々の作家活動の様子や思いを汲み取り、作品づくりのサポートに入る仕事に興味を持つようになった。学生時代からアール・ブリュット作品に興味を持ち、障害者施設で働くことで利用者の障害特性などを知るきっかけとなった。その施設では強度行動障害の人や自閉症スペクトラム障害など様々な利用者がいて、職員と一緒に遊んだり体を大きく動かしたりダンスパフォーマンスの練習をしたりして過ごしていた。

あるとき、キャンバスにアクリル絵の具を出し、食品用ラップフィルムをかけ感度遊びの延長で制作活動を行った。利用者の反応は様々。感覚過敏の人は触れることを拒否され、ある人は食品用ラップフィルムに顔を押し付け感度を楽しんでいた。障害のある人の制作活動の現場では、学生の時に感じた「自由さ」があり、みんなが安心して心置きなく楽しむ姿を見ることが出来る。私もグローという場所で、誰もが自由に見て感じる事が出来る展覧会をつくってみたいと思う。

NO-MAでは、ホームページでの情報発信に加えて、SNSを活用した情報発信も行っています。



NO-MAアーカイブ
<https://no-maarchive.com/>



公式Facebook
museumnoma



公式Twitter
museum_noma



公式Instagram
@museum_noma



NO-MA YouTube
チャンネル

ボーダレス・アートミュージアム NO-MA



滋賀県近江八幡市永原町上16

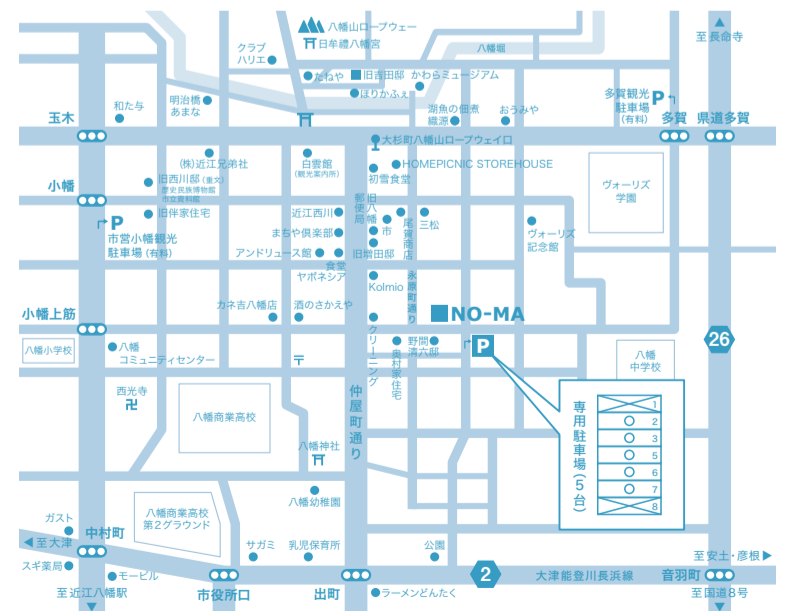
TEL/FAX 0748-36-5018

休館日: 月曜日

(月曜日が祝日の場合は翌平日休館)

E-mail no-ma@lake.ocn.ne.jp

<https://www.no-ma.jp>



Access アクセス

バス JR近江八幡駅から近江鉄道バス(長命寺行き)大杉町八幡山ロープウェイバス下車徒歩8分。
車 名神高速道路・竜王ICより「近江八幡・国道8号」方面へ。
国道8号「西横関」右折、「東川町」左折。県道2号「小船木町」右折、「出町」左折。(計30分)
自転車 JR近江八幡駅から徒歩30分、自転車10分。